

フィリピン・カオハガン島～何もなくて豊かな島～

教育文化学部教育学科初等教育コース1年

1. はじめに

私はカオハガン島研修の説明会最終日の前日に、この研修の存在を知った。私は大学生活で一度は海外ボランティアや海外研修、短期留学をしてみたいと思っていたため、よい機会だと思い説明会に顔を出してみた。そこでカオハガン島について軽く紹介を受けたのだが、話を聞けば聞くほど興味がわき、その場で参加希望を決めた。これが私のカオハガン研修のはじまりである。

私はこの研修に参加するまでカオハガン島について何も知らなかった。カオハガン島はフィリピン共和国のセブ島の東沖、オランゴ島の南、ボホール島の西に位置する海岸線2kmの小さな島である。そこには島民約600人が生活している。そして、1991年に日本人の崎山克彦さんが1000万円で島を購入し、今は「何もなくて豊かな島」として知られている。電気も水も十分になく、スマートフォンはほぼ使えない環境である。今の日本の生活とはかけ離れたカオハガン島に3月8日から3月13日まで多文化理解体験研修に行ってきた。



2. 教育について

私は将来小学校教諭を目指している。そのため、今回の研修を通してカオハガン島の教育について知りたいと思った。カオハガン島には小学校がひとつある。島の子どもたち約 150 人が通っている。小学校 1 年生から 6 年生まで各学年 1 クラスずつと、就学前の子どもたちのクラスが 1 クラスあり、計 7 クラスある。島には小学校しかないため、小学校を卒業すると多くの子どもたちはセブ島の 6 年制の高校に進学する。

日本の小学校と異なる点として、フィリピンの小学校には留年制度がある。日本の小学校の場合は、基本的に児童一人ひとりの能力を問わず平等に進級することができる。一方でフィリピンの小学校の場合は、児童一人ひとりの能力に合わせ進級・留年が決まる。どちらがより良いのかは社会性や教育環境等が異なるため決めることは出来ないと思う。しかし、もし日本で留年制度を用いたとしたら、打ち解けられず不登校の一因になってしまうかもしれない、などいろいろな心配の声が上がるのが予想される。しかし、私たちが今回訪れたカオハガン島の小学校では、そのような心配は全く感じられなかった。研修 3 日目に島の小学校の 5 年生を対象に私たちが計画した授業を行った。児童の中には 11 才の子もいれば 14 才の子もいたが、年齢の垣根を越えてみんな和気あいあいと楽しんでくれた。日本の教育現場では、いじめや不登校の問題が消えることなく挙げられる。カオハガン島の小学校ではどのような問題があるのかを聞いてみた。するとコンピュータ教育について挙げられた。台数が揃わず、またすぐに壊れてしまうと言うのである。私は子どもたち個人や人間関係における問題が挙がるのではないかと予想していたので、大変驚いた。まったくそのような話は出なかったのである。島に住む日本人女性の杉浦さんが島の子どもたちについて次のように話してくれた。「いじめてしまう子は心が満たされていないから、いじめようという気持ちを持ってしまう。島の子どもたちは心が満たされているから、そもそもしじめようとならないのではないかと思う。」と。この話を聞いてなるほどと思った。カオハガン島という環境が生み出す豊かさというものは、人の心にも影響しているのかなと考えさせられた。私が滞在している間に、子どもたちが自分たちの妹や弟の子守りを当たり前のようにこなし、近所の子どもの面倒も見

たりしている様子うかがえた。このようにして育つため兄弟の仲は良く、年上の人を敬うようになるという。こうした育ちの環境も小学校において良好な人間関係を築けている一因なのではないかと思った。



3. 貴重な資源「雨水」

研修に行く前の事前オリエンテーションで強く主張されたことがある。それは水の大切さについてである。島では生活水を雨水に頼っているため、水はとても貴重な資源なのである。お隣の島、セブ島の年間降水量は 2300mmほどあるが、山岳地帯のあるセブ島に比較して、平坦な地形のカオハガン島の降水量はその半分以下ではないかと言われている。乾季になると雨水が底をつき水を買わなくてはならないほどである。あくまで計算上だが、日本人が 1 日に使う水の量は 365 リットルと言われており、日本人の 4 人家族がこの島で今までと同じ生活をしたら 2 か月ほどで島の水を使い切ってしまうらしい。しかし、島民たちは雨水で生活を成り立たせている。研修 4 日目に島民の家庭にホームステイをさせてもらった。その際、島民の家には雨水を貯めるための水瓶が軒下にくっつきもあることに気が付いた。直径、高さともに 1 メートルほどもある大きな水瓶である。屋根から雨水を伝わらせてその水瓶に集めていた。ホストマザーと一緒に料理をし、食器を洗う際に水を大切にしていることがとても伝わってきた。最

近は島民たちも飲み水や料理に使う水は買っているそうだが、洗濯や食器洗いには今でも雨水を使っている。食器を洗う時は、桶に雨水を入れ、何回も効率的に使い回し洗い、最後のすすぎだけ、新しい雨水を使うようにしていた。何か手伝わなければと思い、こまめに食器を洗おうとすると、水は大切なものだから今はまだ洗わなくていいよ、と教えられた。事前に話は聞いていたものの、島民の口から直接聞くととても重みのある言葉に感じられた。しかし島民にとって水を大切にすることは当たり前のことであり、特別な事ではないようであった。また、シャワーにも雨水を使用しているため、使いすぎないように3分間を目標に浴びた。意外と浴びられるものである。自分が今までいかに当たり前に必要以上に水を使っていたのかを思い知らされた。蛇口を捻ればいくらでも水が出てくる日本と違い、島での生活は自然の恵みに感謝の気持ちを持たせてくれる。しかしそのように感じるのは日本で暮らす私だからである。島民にとって水が貴重なものであることは、当たり前のことであり、水が少ないことに関してあまり不便を感じていないのである。島の水事情に関しては当たり前の感覚の差を強く感じた。



4. 島民の温かさと言葉について

私がカオハガン島を訪れて強く印象に残っていることは、島民の温かさである。最初から壁がなかった。みんなが笑顔で私たちを島の生活の一部に受け入れてくれたため、まだ初日だというのに何日も前から滞在していたような感覚を受けた。1日も経てば、島を歩けば挨拶を交わし、誰かしらが声を掛けてくれて、

そこら中から名前を呼んでくれた。島の人たちは基本ビサヤ語という言語を使用しているため、言葉が通じないことも多々あったが問題はなかった。伝えようという気持ちと、理解しようという気持ちがあればなんとかなったのである。言葉はあくまでコミュニケーションツールの 1 つであり、全てではないということ、身をもって感じられた。一方でやはり言葉というものは重要な役割を担っているということも感じた。単語ひとつふたつでもビサヤ語を知っていると会話が弾んだのである。私もそうであるが、外国の方から自国の言葉で話し掛けられると嬉しいものである。また、ホームステイ先では英語で主に会話をしていた。ホストファミリーは私のつたない英語を懸命に理解しようとしてくれ、また私に伝えるために同じ内容の話を何度も繰り返ししてくれたが、話が長くなるにつれて途切れてしまうことがあった。もし私が英語や表現がもっと上手だったら、今よりも深い会話ができるのにと言葉に関してもどかしさも感じた。共通の言葉がなくてもある程度やり取りは出来るが、より深く関わりたい時はやはり共通の言葉は欠かせないなど、言葉について考えさせられた。

5. カオハガン島のスタイル

カオハガン島に住む日本人女性の杉浦さんからのカオハガン島についての説明の中に心に残る言葉があった。それは「問題あるが心配ない」である。島の人にとって「今」を笑顔で、満足して生きることが何よりも重要であるため、先のことであまり悩まないらしい。台風で家が壊れたら確かに問題だが、作り直せばいいから心配はない、というような感じだと教えていただいた。台風に関しては、自然の災害は生活の一部であると捉えているため、心の負担になっていないという。杉浦さん自身も悩みの相談をすると、悩むくらいならやめればいいのかと言われたことがあるそうである。実にシンプルな考え方だなと感心した。島の人は何を大切にしているかがとても明瞭である。今まで私が抱えてきた悩みがとてもちっぽけな事のように感じられた。また考え方だけでなく暮らしもシンプルである。自然の恵みを大切に、その日に必要なだけの食料を取ってきて、生活している。多ければ近所の人に御裾分けをする。そのようなシンプルな考え方と暮らしが、島の温かくおおらかでゆったりとした雰囲気を生み出しているのではないかなと思った。

6. 終わりに

カオハガン島について「何もなくて豊かな島」と聞いていたが、実際に行ってみて自分なりにこの言葉の意味を解釈することが出来た。決して何もないわけではなく、「必要以上のものがなくて今が満たされている豊かな島」と私は感じた。便利かと聞かれれば便利とは言えない。不便かと聞かれれば不便でもない。なんとも言葉にしづらいが、カオハガン島で過ごした数日は確かに過ごしやすかった。全てから解放された気持ちになれた。また訪れたいと心から思った。やはりカオハガン島を表すにはこの言葉が一番合っているのかもしれない。カオハガン島は「豊かな島」である。

